

メンバーズ

小倉 千秋さん (R-166)

「チェロと半世紀、これからも」

5年位前、チェロ協会のウイス・ベルウエイ先生のマスタークラスを見たとき、「何故チェロを弾くのか」の問いに対し、「これが好きだからでしょ」と先生がG線をボーンと鳴らした。この時の感激は今も覚えている。あれからチェロがもっと好きになった。

昨年、チューリングゲン（ドイツ）のエアフルトへ行った。こ



ピアノラ タンゴの歴史より“Cafe 1930”を弾いているところ。
染谷正雄氏(Gt)

の辺はバッハの足跡が今も残っている。小川の流れが1番プレリュードのようだ。ミュールハウゼンの教会前にはバッハの等身大の銅像がある。どの教会へ行っても立派なパイプオルガンがある。ほとんどの教会では、何か練習している音が聞こえてきた。無伴奏チェロ組曲をこのオルガンで弾いたら和音が綺麗なんだろうと想像し、若い時に来ていたらもっと違った人生になったと回顧した。

奏チェロ組曲をこのオルガンで弾いたら和音が綺麗なんだろうと想像し、若い時に来ていたらもっと違った人生になったと回顧した。

アンサンブルチームを指導して

小林 幸太郎さん

第7回チェロの日では、指導役という大変貴重な機会を頂きありがとうございました。今回は小編成のアンサンブルハイドンの「ディベルティメント」を演奏するチーム、ピアノラの「リベルタンゴ」「Fuga y Misterio」を演奏するチームを指導させて頂きました。一般的にチェロアンサンブルと言うと一番上のパートの音域が非常に高く大変で、下のパートに行くにつれて負担が減っていく場合が多いですが、今回の2グループの曲目のうち、ハイドンの終楽章、ピアノラのFuga y Misterioは、どちらもフーガ形式の作品で、それぞれのパートがどれも重要な役割を担う作品でした。

練習会の際には「まずは時間を守ること!」（これが当たり前の様で結構難しい!）を第一優先として、各パートの役割や負担が違う中、基準となる拍や集合地点に集まるといったアンサンブルで最も大切な部分を整えました。そこから「ここは主旋律」「ここは他パートとの連動」など、それぞれのパートが今どういった役割でどこに気を使うべきかといったことを解説して、それに伴ったバランスや音色作りを進めていきました。最初の練習では「もう一回〇〇小節目から行きましょう」といった出来事もありましたが、上記を意識した練習会やゲネプロを経て、本番では無事それぞれのパートがしっかり役割を果たし活躍する良い演奏ができたと思います。

28日の練習会の後は「チェロゼミナール」と言った楽しい時間をご用意頂き、普段コンサートやライブの短いMCでは喋りきれなかった内容も皆様と共有できとても充実した時間を過ごさせて頂きました。また偶然ではありますが、チェロの日1日目は私の誕生日で、チェロを愛する皆様方に祝って頂きとても良い思い出になりました♪

皆様の素敵なチェロライフに今回お役に立てていれば幸いです。また次回のチェロの日も素敵な会になることを願っております。

事務局からのお知らせ

■2017年度会員更新のお願い

4月より2017年度がスタートいたしました。会員の皆様には今年度の会員更新のお知らせをさせて頂きました。更新をご希望の方は5月末までに手続きをお願いいたします。尚、誠に残念ですが、退会をご希望の方も事務局までご一報頂けると幸いです。（お知らせの裏面『変更届』をご利用ください）

■ ご住所・メールアドレス変更についてのお願い

事務局からお送りするお便り・メールが住所・宛先不明で戻ってきってしまうことが度々ございます。ご住所・メールアドレスを変更された場合は必ず事務局にご一報下さい。また、DM便発送の際はクロネコDM便を利用しております。表札をお出しになっていない方は宛先不明となりお送りできない場合がありますので、併せてお知らせ頂けると幸いです。

編集後記

先日、京都府福知山へアウトリーチに行き参りました。チェロ協会としては関西地区での活動は実に久しぶりのことで、ご縁があり実現できたことを大変嬉しく思っております。関東から離れ普段とは違う環境に行くと、改めて人の優しさや心遣いに気付くシーンが沢山ありました。今後大変意義のあるアウトリーチの活動を継続できるよう願っておりますので、皆さまのお力添えを頂けると幸いです。詳細は次号に掲載予定ですので、お楽しみに。

佃 香菜子



市立福知山市民病院



JCS NEWS

日本チェロ協会会報 第48号 （2017年4月10日）

第7回チェロの日、終演



日本チェロ協会は定例イベント「チェロの日」を1月28～29日の日程で開催しました。会期中は2つのコンサートを開催、さらに今年も「チェリストの集い」を開催、チェロ協会会員を中心とした参加者、出演者、聴衆の全員がチェロとその音楽を楽しむ2日間となりました。ホール修繕の影響から、第7回にして初めて「チェロの日」はサントリーホール外、虎ノ門にあるJTアートホール アフィニスでの開催となったものの、参加者の熱気は例年と同様でした。

チェロと仲良くなるコンサート（1月28日）

「チェロと仲良くなるコンサート」には、高橋麻理子さん、中木健二さん、山本裕康さんが登場、マンドリンやピアノとの協演で、会場を盛り上げました。コンサートの幕開けは、高橋さんがマンドリン奏者の堀雅貴さんによる演奏。チェロとマンドリンという目にする機会の少ない編成ですが、ボッケリーニの“チェロ・ソナタ”や堀さんご自身の作品“Acquadanza”などを演奏、優美な音色に聴衆も興味深く聞き入っていました。続いて登場した中木さんはバッハの“無伴奏チェロ組曲第3番”を演奏、その後ピアノの永田美穂さんとドビュッシーのチェロとピアノのためのソナタを協演、チェロの魅力満載の演奏に、会場から大きな拍手が送られました。コンサート第3部では、ベートーヴェン“チェロとピアノのためのソナタ第2番”を山本さんがピアノの諸田由里子さんと協演、繊細さとダイナミックさを兼ね備えた熱演でコンサートの幕を下ろしました。

チェリストの集い（1月28～29日）

今年の「チェリストの集い」参加者は4～24人規模のチェロ・アンサンブル・チームを編成して、「チェロ・アンサンブル・コンサート」に出演。12人のメンバーを集めて参加したチーム「チェロノヒスキー」は昨11月、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の首席チェロ奏者タマーシユ・ヴァルガ氏による指導を受講。また、約20人の個人参加チームも2つ編成され、事前の自主練習や会期中のリハーサルで小林幸太郎さんにご指導を頂きながら、コンサートに向けて丹念に音楽が作られていきました。

参加者は、他に「チェロ・ゼミナール」を受講。28日の練習後には、アンサンブルをご指導頂いた小林さんから、質疑応答形式で演奏に対する心構えやアドバイスなどを頂きました。また29日のコンサート前には、チェロ協会会長の堤剛さん、副会長の中島顕さん、長谷川陽子さんを迎えて座談会を聴講。協会設立20周年を前に、設立の経緯や今後のチェロ協会に対する期待などをお話頂きました。途中で評議委員の倉田澄子さんにも飛び入り参加頂き、チェロ協会の今後について意見を交わしました。

初日のコンサート終了後には、近隣のお店で懇親会を開催。「チェロと仲良くなるコンサート」の出演者や多くの評議委員の皆さんなどにもご参加頂き、チェロを愛する人々が交歓の時を過ごしました。

チェロ・アンサンブル・コンサート（1月29日）

「チェロ・アンサンブル・コンサート」では、アンサンブル演奏に先立って、今年も若手チェロ奏者による演奏として、更なる活

JCS NEWS 第48号 コンテンツ

- ❶ 第7回チェロの日開催報告
- ❷・❸ 第7回チェロの日開催報告
- ❹・❺ Cellists' update

- ❻ オケスタ・マスタークラス開催報告
- ❼ (続) 特別インタビュー
- ❽ メンバーズ/事務局から

日本チェロ協会会報（JCS NEWS）第48号 2017年4月10日発行

発行：日本チェロ協会 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル22階 私書箱509号
電話 03-3505-1991 FAX 03-3582-1310 E-mail office@cello.gr.jp

発行人：堤 剛 編集：日本チェロ協会事務局 編集協力：三和プリンティング(株)



躍が期待されるお二人、牟田口遥香さんと香月麗さんに出演頂きました。牟田口さんはバッハの“無伴奏チェロ組曲第4番”より、香月さんはコダーイの“無伴奏チェロソナタ”より演奏。若手らしい伸びやかでエネルギッシュな音色がホールに響きました。

続いて「チェリストの集い」参加者によって構成されたアンサンブル演奏の先陣を切ったのは、団体参加チーム「チェロノヒスキー」。ワーグナーの歌劇「ローエングリン」、そしてカルロス・ガルデル“首の差で（石島編）”を12人のメンバーで演奏、息の合った演奏が披露されました。続いて演奏したのは、プロの演奏家による特別チーム。特別に編成されたクアルテットのメンバーは、山本祐ノ介さん、玉川克さん、森田啓佑さん、そして佐山祐樹さん。山本さん自身が編曲を担当したビゼーの“カルメン・ファンタジー”では、超絶技巧が随所にちりばめられ、会場也大いに盛り上がる演奏となりました。コンサート終盤には、個人で参加を申し込まれたメンバーによって構成された2チームが登場。一チームはハイドンの“ディベルティメント”より、そしてもう一チームはピアソラの“リベルタンゴ”と“フーガ・イ・ミステリオ”を演奏。どちらのチームも、小林幸太郎さんのご指導や、自主練習の成果を発揮した熱演でした。

会場が異なり、変則的な開催となった第7回チェロの日でしたが、チェロを愛する人たちが作り上げる2日間だった点は、例年と全く変わりありませんでした。また今回も、ステージマネージャの河井拓さん、キャッチコピーを担当頂いた阿南一徳さん、JTホールの皆さま、ボランティアの皆さまをはじめ、多くの皆さまにお力添えを頂いてチェロの日を開催できましたことを、心からお礼申し上げます。

■チェロの日で演奏して

牟田口 遥香さん

私はバッハの無伴奏チェロ組曲4番より3曲演奏させていただきました。このお話をいただいた時に、今まで敬遠していたバッハが頭に浮かびこの機会に弾いてみることにしました。弾く人によって全く違う演奏になるバッハを人前で披露するということは私にとっては勇気の要ることでした。更にお客様はチェロが大好きでチェロを演奏される方ばかり！自分の解釈がどのように評価されるのかとても緊張する本番でしたが、素敵なホールで沢山のお客様の前で演奏することが出来てとても幸せでした。この曲に取り組み改めてバッハの美しさに気付かされ、生涯取り組みたいと強く思いました。

後半ではチェロアンサンブルに入れていただき、とにかくチェロが好き！という方々とピアソラなどの小品を演奏しました。アンサンブルに参加された方々と客席の皆様が一体化していることを感じられました。

チェロという楽器には本当に多くの魅力があると思います。温かい音がしたり、合奏が出来たり、チェロ弾きは優しい人が多いことなど。アンサンブルに参加して、チェロという楽器がますます好きになりました。ホールで演奏出来ること、お客様に自分の音を聴いていただけること、これからも人前で弾きたい、と思う気持ちが次への活力になっています。ずっとチェロを弾き続けることが出来るよう、日々精進していきます。

最後になりましたが、このような機会をくださった日本チェロ協会関係者、聴いてくださった皆様にお礼申し上げます。

香月 麗さん

私が日本チェロ協会の演奏会に参加させて頂くのは3回目です。

した。初めて参加したのは2011年のチェロ kongress・イン・ジャパンのチェロ・オーケストラです。サントリーホールの大ホールでの演奏はチェロの音が溢れ、海のようなでした。まだアンサンブルとは何か分かっていない中学生の私でしたが、その中に身を委ねて弾く事が楽しく気持ち良かったことを覚えています。地方出身で東京に知り合いがあまりいない私ですが、クリニックやマスタークラス、オケスタなど参加させて頂く度、チェロのお知り合いが増え、日本チェロ協会のイベントに参加することがとても楽しみになっております。

今回、私はコダーイの無伴奏チェロ組曲を弾かせて頂きました。演奏しているとき、曲に対してお客さまが好奇心を持ってくださっている事が伝わってきて、無伴奏曲は舞台の上で一人で弾く孤独なものだと想像していましたが、この日私は一人だからこそ、いつもよりお客様の呼吸をも感じとれ、お客様と共に曲を弾き終えたという達成感を味わうことができました。

また舞台上で弾くと、普段家で練習している時よりも静と動が感じられて、私の音が宙を切って何か彫刻のような物を作っている感覚がして、普段とは違う集中力が必要でした。私にとって新しい経験、発見が沢山の本番でした。

その後の先生方や会員の皆さまとのアンサンブルも、チェロの魅力を存分に味わうことができました。素敵な機会を与えて下さった日本チェロ協会の皆さまに、心よりお礼申し上げます。そして、今年20周年を迎えられる日本チェロ協会の益々の発展をお祈りします。

■チェリストの集い:アンサンブルチーム参加者の感想

木村 和美さん(ハイドンチーム)

チェロの日の参加は6回目ですが、今回は会場がJTアフィニスとなったため、いつもの大合奏ではなく、小グループに分かれての演奏となりました。私が入ったピアソラチームは20名弱。指揮者無しで、リベルタンゴとフーガ・イ・ミステリオの2曲に挑戦です。高音部を希望したものの、届いた譜面は想像以上の超高音ばかりで焦りました。今までのように大勢に紛れて気楽に弾くことはできないため、自主練も初回からほぼ毎回参加しました。練習では1パートが一人だけで冷や汗をかいたこともありましたが、練習後のランチでチェロ談義に興じたり、同年輩で「70同盟」を結成して「70代は育ち盛り」などと気炎を上げたり…。同じパートの優しい仲間たちにも助けられて、楽しい時間を過ごすことができました。

チェロの日は小林幸太郎先生の公式レッスンで幕を開けました。先生のミステリオのソロの入りが格好良くドキッ！自主練から一気にグレードアップした気分です。夜の懇親会では先生の26歳の誕生日をお祝いしました。

迎えた本番。コンマスの幸太郎先生に加え、堤剛先生、長谷川陽子先生、香月麗さん、牟田口遥香さんの豪華な賛助が揃い、胸が高鳴ります。プロの圧倒的な音、疾走するリズム。速い！アマチュアだけでは決して味わえない、エネルギーの爆発です。高揚感に包まれ、あっという間に演奏終了。「20数名が指揮者無し、しかも限界ギリギリのテンポで、よくフーガを弾き切った」という思いが込み上げました。アンコールはモーツァルトのアヴェ・ヴェルム・コルプス。静謐な空気の中でチェロの日の幕が下りました。そして熱狂の一日の締めは、もちろん共に努力した仲間とビールで乾杯！

アマチュアが日本のトップ奏者と一緒に、豊かな響きに包まれて弾く…こんなことはチェロ以外の楽器では考えられません。夢の

ような企画を実現してくださった堤先生を初めとするチェリストと事務局、ボランティアの皆さまに心から感謝します。「チェロを趣味に選んでよかった！」しみじみ幸せを感じたチェロの日でした。

白川 正広さん(ピアソラチーム)

「チェロの日」との出会いは、チェロを始めて間もない頃、「チェロ kongress・イン・ジャパン 2011」という行事を偶然目にしました。イベントが盛りだくさんで、すっかりファンになってしまいました。一流のプロの演奏も楽しみですが、毎回行われる一般参加者のアンサンブル演奏をみて聴いて、いつかは一緒に演奏したいと憧れておりました。昨年チェロ協会へ入会し、演奏に参加させていただきました。今年は2年目、昨年の経験はあるとはいえ不安がいっぱいでしたが、石島栄一さんが自主練習のご指導をしてくださるとのことですまずは一安心。ただし、チェロ三部合奏の第3パートを担当したところ、ハイドンの曲は出だしが第3パートの発する音で始めねばならず、自主練習では「ザッツ」の出し方まで教わりました。

小林幸太郎さんには、アンサンブルでは音程よりも各小節の頭をしっかりと合わせるとよく聞こえるという裏ワザ、さらに、本番で緊張する要因と緩和する方法を身体の部位にまで分析して教わり、短時間ながらいへん勉強になりました。

そして迎えた当日。なんとリハーサルから第3パートのトップには堤会長が座られ、一緒にステージで演奏できるチャンスが巡ってきました。感動しました。本番も緊張感はありませんでしたが、背中ではリードしてくださっていることをヒシと感じ、予想以上にスムーズに演奏することができました。このような経験は「チェロの日」以外では味わえません。ぜひ来年も参加したいと狙っている一人です。

山岡 陽子さん(チーム「チェロノヒスキー」)

今回のチェロの日に、チェロノヒスキーとして出演させて頂き、ありがとうございます。JTホールの素晴らしい響きに助けられながら12人で演奏することができ、これまで以上の充実した幸せに包まれました。

チェロの日には2010年の第1回から、翌年の kongressを含め毎年参加させて頂いていますので、昨年9月に2017年の開催概要を 拝見したときにも、いずれの形式にせよ、とにかく出る、と決めていました。次に、タマーシユ・ヴァルグ氏のレッスンを受講できるという、またとない機会を逸してなるものかと、欲張りな気持ちが頭をもたげ、チェロ仲間次々と連絡を取りました。思いを同じくするメンバーが12人集まりました。嬉しいことに、皆チェロの日に参加して以降、次々に増えていったチェロ仲間、音楽友達なのです。協会のイベント以外にもいろいろなところで、チェロアンサンブルと一緒に楽しんできた仲間が、それぞれのグループやオケの練習と掛け持ちしながら、忙しい中、時間をやりくりして練習に集まってくださいました。アマチュアとはいえ、プロの方と同じステージに立たせて頂けるのですから、恥ずかしい成果をお聞かせしないといけない、その一点の目標に向かって、秋以降練習を重ねてまいりました。

さまざまなバックグラウンドを持った12人だからこそ奏でられる幅のある（音程の？ いえいえ…）ふくよかな 響きを目指しました。堤先生がよく仰る「チェロ弾きは世界中でも皆仲良し」を実感するのは、チェロを通して知り合った仲間が、本当によい友人であることからです。チェロとこれらの友人は、中年になってチェロを始めた私の、人生後半に神様がくださった贈り物だと思っています。

寺田 義彦さん (R-087)

Yoshihiko TERADA

1. 近況を教えてください

国内で公益社団法人 才能教育研究会 スズキ・メソードの指導者として教えております。海外では一昨年 Melbourne (Australia) と Davos (Switzerland)、昨年は Rotorua 及び Auckland (New Zealand) で開催された Suzuki Method Teacher Conference と同 work shop に赴きました。いずれも約7～10日間、4歳から大人まで大勢の参加チェリストと楽しく過ごしました。また台湾では台北の青少年弦楽団チェロメンバー育成に10年以上協力しております。国籍や言語が異なっても同じチェロと音楽によって心が通いますね。New Zealand Suzuki Instituteは3年に一度開催する New Zealand (以下 NZ) 国内スズキ指導者向けの研究大会ですが、待講師として USA からヴァイオリン、ピアノ、フルート、そしてチェロは寺田が招かれました。期間を通して、多くの参加者の幼児時期から始める器楽教育に対する研究熱心さが伝わりました。最終日の式典で大会参加者全員が講師にお別れの挨拶として原住民マオリ族の歌を暗譜で歌われ、ポリネシアのメロディに西洋音楽のハーモニーが加わってとても感動しました。

その後に Auckland の指導者を中心となって開催される Cello work shop へ向かいました。NZ のスズキ指導者はほとんどがヨーロッパ系の方でしたが、受講する参加者は世界各地のルーツを持つ子供さんが多く、この国の多様性豊かな未来を感じました。

・ご指導で、大切にされていることは何ですか。

生徒さんがチェロを演奏できる喜びを感じられるように心がけて指導しています。チェロは独奏だけではなく、多くのアンサンブルで必要とされる楽器ですので、僭越ながらこのチェロを演奏することで「国籍」「人種」「民族」「信仰宗教」「性別と年代」の壁を越え、世界中の人々と交流できることをお伝えしています。



2. チェロを始めたきっかけを教えてください

弟が習っていたヴァイオリン教室の合宿に付き添いで参加、自分も楽器演奏したくなりました。弟のヴァイオリンの先生に相談したところ、11歳なのでチェロを勧められ、選びました。

3. 一番ワクワクするときは、どんなときですか？

チェロ指導や演奏も同じですが、自分が良いと思ったことを行動して、実現する時です。約20年前に全国の才能教育研究会会員へ「中古楽器募集」を呼びかけ、集まった楽器を海外の希望する国や団体にお渡ししました。昨年春、東京で私が指導を担当する生徒のお母様、現在の駐日ジャマイカ大使夫人 Suzanne Allcock 様からご相談を受けました。夫人の母国ジャマイカのユースオーケストラ National Youth Orchestra of Jamaica (NYOJ) は、ベネズエラにて青少年の健全な成長を願って始まったエル・システム方式で団員育成を行っております。以来、発展を続けていますが、学ぶ子どもたちの楽器が常に不足しています。

※ National Youth Orchestra of Jamaica → <http://nyoj.org/>
そこで大使夫人は日本にて楽器寄付を募ることを発案され、私に協力を依頼されました。この件を才能教育研究会本部事務局に打診しましたところ、まだ同所に過去の寄付楽器が保管されていることがわかりました。それ全てを6月ジャマイカ大使 Ricardo Allcock 様へお渡しできました。内訳はヴァイオリンのうち21本と弓、残念なことにチェロはありませんでした。しかし、この報告記事がネットで紹介されると寺田の元にハーフサイズの中古チェロ2本が届きました。ありがたいです。僅かでも世界のチェリストを育てる援助になれば嬉しいですね。日本チェロ協会の皆様で使わなくなったチェロがございましたら、是非お知らせください。

【お薦めの催し物】

アメリカのチェロキャンプ National Cello Institute 2017 June 25 - July 1 (USA, California/ Pomona college) に今年で9年目の Faculty として指導を受け持っています。ここでは堤剛先生のご友人チェリスト Anthony Elliot 氏指揮による Faculty Cello Ensemble 出演の機会があり、彼の音楽作りと仲間たちのチェロ合奏を楽しむにしております。
詳細: <http://www.nationalcelloinstitute.com/>

植木 昭雄さん (R-189)

Akio UEKI

1. 近況を教えてください

今年で44歳になるのですが、40歳まではソロや室内楽、クラシック以外のジャンルのお仕事、家業の楽器屋の経営などありとあらゆる事をやってきたのですが、40歳を過ぎた頃からオーケストラでゲスト主席として弾かせて頂く機会が増え、最近オーケストラの魅力にとりつかれています。

・きっかけは何ですか？

演奏の場が変わったきっかけの一つに「弾いている楽器が変わったこと」があります。私は6歳でチェロを始めてから33歳まで、ずっと弦楽器製作者である父が作ったチェロを弾いていました。父のチェロは本当に澄んだ音色で力強く大好きなのですが、一度しかないチェリスト人生なので、一度はオールドのチェロを弾いてみたいという思いがありました。33歳の時父親が脳出血で倒れ仕事ができなくなり、自分のチェロを調整してもらえなくなったのをきっかけに、オールドの楽器を弾くようになり、いくつかの楽器を経て40歳で今弾いているイタリアンオールドのチェロに出会いました。持つ楽器が変わると、自然と演奏も変わりますし、音楽に対する考え方も変わってきたように思います。

・オーケストラで演奏される時の醍醐味は？

オーケストラの醍醐味を語れるほど経験はないので偉そうなことは言えないのですが、やはり作曲家が一番力を入れて作曲したのは交響曲などオーケストラの曲なので、それらの曲を隅々まで勉強し、一人で弾く時とは違ったチェロセクションとしての音色で弾けるのは本当に勉強になりますし、弾いていて幸せです。素晴らしい指揮者やソリストと同じ舞台上で共演でき、アンコールですぐ目の前で世界的ソリストの演奏が聴けたりするのも魅力の一つです。

2. チェロを始めたきっかけを教えてください

弦楽器製作者である父は、私に自分の仕事を継がせるためには何か楽器



が弾けたほうが良い、と思い私が5歳になったばかりのある日、子供用のヴァイオリンとチェロを持って帰ってきました。小さかった私は当然大きいほうを選びました、というのは冗談で、家にあったボッケリーニのチェロ協奏曲のレコードがお気に入り、レコードがすり減るまで自分でかけて聞くほどチェロの音が好きだったようです。

・チェロを扱う上で一番心がけていることは？

私は家業の楽器屋もやっているの、よくお客さんにも聞かれるのですが、私はいつも「自分の家族、子供だと思って扱ってください」とお答えしています。人間でも蒸し暑い湿気の多いところに長時間いれば体調が悪くなりますし、子供の顔が汚れていたら思わず拭くでしょうし、地震が来て棚が倒れてきそうところに子供を寝かせません。楽器も同じだと思います。

3. 一番ワクワクするときは、どんなときですか？

ソロでも室内楽でもオーケストラでも、チェロのおいしいメロディーやソロが出てくる曲を弾くときは本番前ワクワクします。

・一番好きな曲は何ですか？

一番決めるのは難しいですが、みなさんがよくご存知な曲で言うと、チャイコフスキーの交響曲5番の2楽章や、リムスキーコルサコフのシェヘラザードの3楽章などなど、たくさんありすぎて書ききれません！

4. チェロ以外に好きなことはありますか？

冬はスキーに行つて滑るのはもちろん、温泉に入りながら雪景色を見るのが最高です。あとワインが大好きで、大変な本番が終わった日の夜お気に入りのワインを飲むと、この上ない幸せを感じます！

【演奏会情報】

川島成道グランドファミリーコンサート2017

日時/2017年5月27日(土) 13:30開演

会場/紀尾井ホール

料金/S席:5,500円 A席:4,500円

出演/川島成道(VI)、佐藤勝重(Pf)、植木昭雄(Vc)

問/テンポプリモ:03-5810-7772

植木昭雄公式HP: <http://www2.odn.ne.jp/cello-grand-cru/>

中木 健二さん (R-475)

Kenji NAKAGI

1. 近況を教えてください

10年間のフランスでの生活を終えて帰国してからもうすぐ3年が経ちます。昨年は2枚目となるバッハの無伴奏チェロ組曲全曲録音をリリースするなどソロ活動に加えて室内楽での公演や、意欲的で熱心な学生のレッスンを通して刺激的な毎日を送っています。

・渡仏中、印象に残っている出来事がありますか？

フランス滞在中は学生のころ～オーケストラ在籍時を通して様々な演奏会に出演させていただきました。ソロでは多くの現代作品にも取り組みましたし、カルテットを結成して活動していた時期もあり、演奏会のどれもがかけがえのない経験となって今の自分の音楽感の基礎となっています。

どれか一つの出来事を選ぶのは難しいですが、強いて言うなら師事した巨匠との出会いは自分にとって最も衝撃的でした。イタリアとスイスで師事した A. メネセス先生です。先生は卓越した音楽家であるだけでなく、人間的にも素晴らしい方で、大切なことを沢山教えてくださいました。

・バッハの作品を取り上げられた理由は？

単純に、一番好きな作品だからです。他のどんな作品に取り組むときでも必ず並行して練習してきましたし、毎日バッハを練習の最後に弾くことは留学時代から続けている習慣です。

どれだけ弾いても決して飽きることはなく、毎日必ず新しい発見がある。その喜びは計り知れないですし、演奏会でそういった作品を演奏できることはこの上ない喜びです。



©Mirco Magliocca

2. チェロを始めたきっかけを教えてください

母からの勧めでした。母はアマチュアのピアノ教師だったのですがカザルスの大ファンで、僕が生まれる前からチェロをやらせるつもりだったそうです(笑)

3. 一番ワクワクするときは、どんなときですか？

1. 素晴らしい音楽家と共演させていただくとき。
2. 本番後、一杯目のビールを注文したとき。

4. チェロ以外に好きなことはありますか？

料理。食べることに。

5. 1月にチェロの日にご出演いただきましたが、いかがでしたか？

チェロを愛する大勢の皆様と過ごした時間は忘れがたいひとときとなりました。同時に、お世話になった先生方などお客さんの中の大勢の方がチェリストという舞台上で演奏することはものすごい緊張感で、まだまだ修行をつまなくてはと再認識させられました。

6. 今後どのようなチェリストとして活動していきたいか教えてください

ソロや室内楽のジャンルを問わず、常にその作品の持つ素晴らしさを会場で共有できるような演奏を心がけて演奏活動を続けていきたいと思っています。

【演奏会情報】

hakuju ホール スーパー・リクライニング・コンサート

日時/2017年7月14日 15:00/ 19:30(2回公演)

会場/hakuju ホール

料金/2,000円(全席指定リクライニング席)

出演/中木健二(Vc)、永田美穂(Pf)

問/hakuju ホール

黒川 実咲さん (R-440)

Misaki KUROKAWA

1. 近況を教えてください

今はオーケストラに呼んでいただいたり、室内楽やソロを演奏させていただいたり、沢山の機会をいただいています。

2. チェロを始めたきっかけを教えてください

2歳になる頃、母に連れられチェロのレッスン場に行き、そのまま今に至っています。スズキ・メソードの中島薫先生に13年余りレッスンをして頂きましたが、小さい頃は落ち着きのない、話し出すとおしゃべりが止まらない子供だったそうです。

3. いつ頃からチェリストとして歩まれることを意識され始めましたか？

小さい頃からチェロしか弾いていなかったですし、近い将来もチェロを弾いていたいという気持ちが常にあり、デュ・プレが好きで演奏家になりたいという夢を持つようになりました。マスタークラスをきっかけに倉田澄子先生とお会いし、高校卒業後から師事しておりますが、レッスン前後にある「カフェすみこ」は私にとってとても貴重な時間です。倉田先生が一言目に仰った「チェロのお母さんと思って」という言葉が今でも忘れられません。私の心の支えとなっていますし、チェリストとして、また女性として憧れの存在となっています。

4. 一番ワクワクするときは、どんなときですか？

演奏会が決まった後に、その演奏会で弾く曲のことを想像するととてもワクワクします。本番前はなるべく普段通りでいたいと思っておりまして、『こうしよう』といったと違うことをしようとする逆と逆に心身のバランスが崩れてしまうので、体調管理に気を付け、自然体でいられるように心がけています。

5. チェロ以外に好きなことはありますか？

食育すること、寝ることでしょうか。笑

6. これまでチェロ協会のイベントに多数ご参加頂いていますが、印象に残っている出来事などはありますか？



どれも印象に残っていますが、チェロの日のリレーコンサートに出させていただいた時のブラームスのソナタはとても印象に残っています。終わった後の懇親会でも、チェロを弾かれている皆さんと楽しくお話して過ごせたのも本当に嬉しい時間でした。ピアニストは大学の同期で、大学時代からよく一緒に演奏している江沢茂敏さんでしたが、以前、チェロ協会のマスタークラスでシュトラウスを受講した時も江沢さんにお願いしていました。卒業するとなかなか演奏する機会がないと会うことも少なくなっていますが、本当に信頼でき、お互い高め合いながらも楽しく演奏できる相手と出逢えたことは幸せなことだなあと、いつも感謝しています。

7. 差し支えなければ、今後どのようなチェリストとして活動していきたいか教えてください

師事している、倉田先生、山崎先生を、女性として、また音楽家として目標にして精進していきたいと思っています。

・“チェリストとして活躍したい場”というようなイメージなどお持ちですか？

今は、本当に環境に恵まれており、カルテットを組んだり、ピアノ室内楽等、色んな方と演奏する機会があって本当に有り難いと思っています。これからも様々なことに取り組みたいという気持ちが大きく、演奏の場を限定せずに様々なことに挑戦しています。日々勉強！と痛感しているところで、海外に出て、より音楽に触れたい、音楽以外の芸術も楽しみ吸収したい、と向上心を持ち日々過ごしています。

【演奏会情報】

黒川実咲リサイタル

日時/2017年6月14日(水) 18:45開演

会場/名古屋メニコン HITOMI ホール

料金/3,000円(全席自由)

出演/川合亜実(Pf)、黒川実咲(Vc)

曲目/ラフマニノフ:チェロソナタ、他

タマーシュ・ヴァルガ オーケストラ・スタディー 開催



日時：2016年11月14日(月) 18:30

日本チェロ協会は、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者のタマーシュ・ヴァルガ氏をお招きしてオーケストラ・スタディーを開催しました。会場には将来プロオーケストラで演奏を希望する8名の若手チェロ奏者が集結。舞台には譜面が投影され、客席の聴講者も楽譜を見ながらレッスンが進みました。ヴァルガ氏は、ウィーンフィル首席奏者のご経験を惜しみなく披露され、ユーモアを交えつつ、楽譜に忠実に演奏する重要性を強調されました。

受講生：伊藤七生、大槻玲香、香月麗、小林保子、佐山裕樹、高木冴子、築地杏里、堀井龍太郎、牟田口遥香

参加者の感想より

- ・今後のオケパートの練習方法の参考にしたと思い参加した。
- ・先生が音楽を『Story』とお話され、オケの音楽にも自分自身のイマジネーションを非常に膨らませ楽しんでらっしゃることが印象に残った。
- ・楽譜の裏側にある作曲家の本意を汲み取り楽譜通りに弾く、という地道な作業のひとつひとつが素晴らしい演奏、オーケストラを生み出しているのだと思った。
- ・先生は楽譜を見て勝手にインスピレーションで弾いてしまうのは『No』と何度も仰ったので、今後は作曲家の意図したことをきちんと演奏できるよう楽譜を読みたい。
- ・和声構造を読み取りフレーズや音色を変える、一流のオーケストラとはそういった一人一人の考えによって多彩な音楽が作られている、というプロの世界を少し知ることができて嬉しかった。



マリオ・ブルネロ チェロ公開マスタークラス 開催

日時：2016年11月22日(火) 19:00

会場：汐留ベビシュタイン・サロン 通訳：高島まき

来場者数：会員50名、非会員19名 関係者11名

去る11月22日、マリオ・ブルネロ氏をお招きしマスタークラスを開催いたしました。世界的チェリストとあってその期待は高く、ベビシュタインの小さなサロン会場は多くのチェリストで埋め尽くされました。

受講レポート

内山 剛博 桐朋学園大学 在学 (伴奏：石橋 尚子)

シュベルト：アルペジオーネ・ソナタより

今回の受講曲は夏頃から始めてとても苦戦していた曲でした。思うように弾けず悩んでいたところ、マスタークラスを受講する機会を頂きとてもラッキーだと思いました。まずブルネロ氏に言われたのは、メロディーをシンプルに捉えることでした。第1主題のリズムを一度取って弾くとシンプルな構造であることを実感し、不自然な膨らみや不要なビブラートを減らすことが今後の課題として見えてきました。テンポが早い第2主題の癖は、16分音符が走ることです。もっとピアノとアンサンブルをしないとダメだと思い、ピアノの美しい部分を意識して演奏するきっかけになりました。そしてチェロで弾くのに難しいと言われる跳躍については、左手の準備が遅いことと弓の返しの時間差について指摘されました。レッスンを終え、全体的にシンプルに捉えて1から作り直し、難しい部分も簡単に聴こえるような演奏を意識して今は練習しています。

今後またこういう機会で演奏できるように精進していきたいと思います。

水野 優也 桐朋学園大学 ソリスト・ディプロマ・コース 在学

(伴奏：五十嵐 薫子)

ドビュッシー：チェロソナタ ニ短調

今回の受講曲は、今まで取り組んだ曲の中で、演奏者によって「最も全く曲想が変わる曲」だと感じていました。どんなレッスンをして下さるのか、とても楽しみでワクワクしていました。ブルネロ氏のレッスンはとても細かく丁寧で、全てにおいて的確でした。全体にわたり「楽譜に忠実に」と何度も指摘されました。ドビュッシーの楽譜はとにかく細かく指示が記されており、1楽章で言えば dolce sostenuto→piu dolce→piu p→ppと2小節ごとに楽器が変わったように音色を変えていく。もっと大袈裟に表現しないと聴き手に伝わらないことを実感しました。先生は説明するときに「ピチカートギターのコードを弾くみたいに」「3楽章に向かうところは、遠くからダンスを誘ってそれがだんだん近づいてくるように」と、イメージと共に説明して弾いて見せて下さいました。もちろん答えは1つではないと思いますが、イメージが明確にあるだけで表現がまるで変わっていくような気がしました。ただ、イメージがあるだけでは理想の音が出せず、今回間近で世界的なチェリストの音を聴いて、ブルネロ氏のような重厚な音、自由自在にかかるビブラートが本当に羨しかったです。

森田 啓佑 桐朋学園大学 ソリスト・ディプロマ・コース 在学

(伴奏：鈴木 慎崇)

プロコフィエフ：チェロソナタ ハ長調 作品119

このレッスンで強く印象に残っていることが2つあります。まず倍音の感覚です。受講曲の出だしでは、個々の音だけでなく楽器全部の倍音を鳴らすよう教わりました。倍音が鳴ると音が響き渡り、ホール全体が一つの楽器になるような効果が生まれるそうです。2つ目は、音が後で膨らむような弓の運びをしないことです。私は弓元から弾き始めて4分の1程で音が定まる為、弾き始めから定めるように言われました。レッスンではブルネロと交互に一音ずつ弾きましたが、ブルネロの音は最初から均一で詰まった音でした。私の音はアクセントのような発音で安定せず、きちんと音を出しているつもりでもそうでなかったことが

分かり、新たな課題も発見できました。

今回のレッスンではブルネロの音を間近で聴くことで、音のインパクトや密度をよりリアルに耳に残すことができました。それを一つの目安とし、これから私の音を探し求めていきたいと思います。翌日の演奏会では、ブルネロが右手を動かした瞬間から音のインパクトを感じ、倍音が響き渡り、私自身が音に包まれているような感覚になりました。素晴らしいレッスンをありがとうございました。

佐藤晴真さん・森田啓佑さん 特別インタビュー

(前号から続く)

“サッカーに専念してみたら、

気持ちがチェロに戻ってきて” (森田)

【渡邊】なるほど。高校に進学する前、自分で楽器を弾く以外に、コンサートを聴きに行く機会もありました？

【佐藤】名古屋だと東京よりコンサートの数も少なかったので、今ほどは無かったですけど、チェロのリサイタルには行くことはありました。

【森田】僕は、行こうと思えば機会はあったのですが、部活で夜遅かったので、ほとんど行けなかったです。

【渡邊】なるほど。どうしても順番付けの問題もありますしね。そして音楽高校に進まれて、佐藤さんが藝大の付属、森田さんが桐朋の付属というか女子高等学校の音楽科ですね。学年的には…

【森田・佐藤】同い年です

【渡邊】なるほど。じゃあずっと同期なんだ。記憶にある限りだと、初めて2人が会ったのは…？

【森田・佐藤】山中湖です。

【渡邊】そうなんだ。山中湖は相当すごいきっかけになってるのかもしれないですね。

【佐藤】初めて一緒にトリオやったんだよね。

【渡邊】何を弾いたのか覚えていますか？

【佐藤】ポッパーのレクイエムを。

【森田】もう1人チェロがいて、あとピアノで。

【渡邊】なるほど。もう1人のチェリストは…？

【森田】香月麗さんです。

【渡邊】ああ！なるほど。

【渡邊】佐藤さんの場合、高校から東京にいらっしゃることになりますよね。ご家族は？

【佐藤】母と東京に住んで、父と兄が名古屋に残ってます。

【渡邊】やっぱり自分の中で、結構大きな判断ではなかったですか？

【佐藤】多分、自分より母が大きな判断しましたね。

【渡邊】なるほど。

【佐藤】もう後戻りできないんですよね、ここまで来ちゃったら。

【渡邊】なるほどね。ちなみに、差し支えなければなんですけど、お二人ともご兄弟も楽器をされていてということでしたが、今はご兄弟も演奏されているのですか？

【佐藤】高校入るまでは、兄もやりましたけど、今は映像系の大学進んで、映画撮ってます。

【渡邊】趣味では続けてらっしゃったりはしないんですか。

【佐藤】去年、夏に帰ったときに、チェロ触らせてって、バツハ弾いてました。意外と音程良かったです。もう4年とか弾いてなかったのに(笑)。

【渡邊】森田さんのお兄様は？

【森田】今、大学のオケでバイオリンを弾いていますね。妹もバイオリンを習っています。

【渡邊】大学オケでバイオリンを続けられている。プロにならなくても、楽しみ続けてらっしゃるっていいことですね。いいですね。



【渡邊】音楽高校に進まれて、もう3年が過ぎて卒業されたわけですが、音楽高校での3年間って、いかがでした？ざっくりとした質問で申し訳ないけれど。音楽家を目指してるような人たちに囲まれるとか、いろんな変化があったと思うんですけど、3年間を振り返ってみて、なんかすごく印象に残ってることだったりとか、自分の中で変わったこととかってありますか？

【森田】取りあえず一言で言うと、濃い3年間で。僕、中学は男子校で、しかもサッカー部、桐朋の音楽科っていうと、男子と女子が1対8で。男子校から女子校にいきなり…。

【佐藤】そうだね。

【森田】最初は勝手が分からなくて、今はだいふ慣れましたけど。で、音楽でも、弾くということしかやってなかったんで、アンサンブルでしたり、曲の分析ですかね、アナリーゼ、そういうのが新しい発見です。

【渡邊】なるほど。そういう意味では、生活的に言えば、突然・・・。

【森田】突然変わりました(笑)。

【渡邊】女性に囲まれるという生活が一つと。もう一つは音楽をやる上だと、弾くこと以外の音楽の幅っていうか、やることが増えたって感じですか。佐藤さんの場合、どうですか。

【佐藤】中学の同級生は普通の感じなんですけど、高校の同級生は、何だろう。

【森田】個性的というか…

【佐藤】そう、みんなすごく個性的。だからいろんな人がいますし、その中で本当に仲のいい人がいると、音楽に関して、中学の同級生との会話とは一味違った深い会話ができるようになったと思います。会話の質というか、それが一気に上がった気がしましたね、高校に入ると。

【渡邊】自分が語りたいことを語れる仲間が見つかる、みたいな感じかしら。

【佐藤】そうですね。

“音楽と一緒にずっと生きていくんだって

いうのは感じてました” (佐藤)

【渡邊】なるほど。そういう意味では、同じ方向を向いている仲間が近くに増えるっていうのは大きいのでしょうか。ちなみに、音楽高校に進まれる段階で既に大きな決断をされているとは思うんですけども、いまさらの質問ですが、お二人は、今この段階で、音楽家になるということを目指していますか。もちろん、ここまで来たら後戻りできないというものもあると思いますが、迷うときがあったりしましたか？

【森田】迷ったのは、中3の時に音楽高校に行くか行かないか、そこだけですね。

【佐藤】僕は、初めて受けたコンクールが小学校5年生のときで。そのときに、初めて出たコンクールで、一応頑張ろうとは思ってたんですけど、いきなり銅賞をもらってしまっ。それで、結果出せたっていうのがすごくうれしくて。それで、どうせやるなら銅賞じゃなくて、次ももっといいところ目指さなきゃなって思ってた。来年とその次の年も受けていったんですけど。そういうスパンの中で、だんだんとですかね、ずっとチェロ弾いてくのかなという気持ちはありました。

(続きはWEBをご覧ください)